

新左翼の理論闘争を組織するという考想について

大谷美芳(2023.08.12&08.31)

「私のポジションは、基本『新左翼』(ブント、革共同の止揚+構造改革派)の再編成に向けての『政治評論』『政治論争』の組織化と考えています。WEBリベラシオン社は、大仰に言えばそう考えて開設しています。政治闘争、大衆運動の『共同行動』再建も不可欠ですが、『政治』党派の政治理論、路線の『共同論議』も不可欠と思います。」(岩田吾郎/WEB リベラシオン社)

(1)理論闘争を組織する 成り立つか？

70 年闘争当時は、ロシア革命は変質したが中国革命は文化大革命があり、ベトナムを中心に民族解放闘争があり、世界は社会主義へ進んでいる、未来はバラ色、そう見えた。

それが唯物論的な基礎となって、反米と民族解放から社会主義へという革命論の基調があり、各党派の路線は実は多少の差異でしかなかった。党派間の批判と論争は、実は内部固めに過ぎず、路線をめぐる思想的政治的な理論闘争は成立しなかった。第二次ブンド結成と、日本共産党(現代修正主義)と決別した第一次ブンド結成との差異。

しかし暗転、ソ連だけでなく、中国もベトナムも社会主義へ進めず、それどころか、反米・民族解放闘争の全体が、反対物=後発の資本主義と帝国主義へ変質・転化した。

さらに、この変質・転化とそれを担った現代修正主義に反対して闘争した中国文化大革命と毛沢東思想が、無残に破綻した。それに連動した日本の新左翼も無残に破綻した(連合赤軍事件と「対革マル戦争」)。以来、現在まで、社会主義革命の運動は組織も理論も停滞、むしろ崩壊が続いている。だからこそ、もうそろそろ路線をめぐる論争が成り立つ。

(2)論争の論点を考える

論点は、①ソ連論・中国論、②マルクス・レーニン主義および 20 世紀の総括、③社会主義革命の陣地戦論でしょう。新左翼の間でどういう論争になるか(それが日本におけるマルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の現実)、考えてみます。

①ソ連論・中国論 「反スターリン主義」批判

現代世界をどう認識するか。論争は始まっている。米国・西欧・日本と中国・ロシアの対立と闘争を、その中でのウクライナと台湾の問題をどう見るか(両者は全く別の問題だが交錯している)。ロシアだけでなく、中国を資本主義・帝国主義と見るか、「歪曲」とか「疎外」とかの否定的形容詞を付けるが、結局は社会主義と見るか。

「反スターリン主義」は、ソ連と中国に対して、官僚主義の批判にとどまり、生産関係、官僚が国有の生産手段を独占して労働者階級を従属させ支配する官僚制国家資本主義に対する批判がない。資本主義に対して、生産手段の独占者に労働者が従属する=賃金奴隷制という批判がない。「労働力の商品化」=非人間的という批判になっている(宇野経済学)。

②マルクス・レーニン主義と 20 世紀を総括する

トロツキズムの永続革命論を清算する

ソ連や中国など、官僚制国家資本主義の出現は、第1にマルクス・レーニン主義の歴史的な限界であり、第2に 20 世紀の歴史的必然性であった。そう総括しないと、21 世紀の社会主義革命論は構築できない。

1848 年ドイツ革命以来、ロシア革命も中国革命も全て、ブルジョア革命をプロレタリア階級のヘゲモニー(主観的能動性)で、プロレタリア革命へ発展させ、資本主義の発展を経ないで社会主義を実現しようとした。それがマルクス・レーニン主義であった。

しかし、ロシア革命も中国革命も、プロレタリア階級と農民つまり人民の民主主義的独裁(ロシアではNEP)から、プロレタリア階級独裁の社会主義的独裁へ進もうとしたが、官僚主義で国家所有と集団所有が官僚制国家資本主義へ変質・転化した。資本主義化の唯物論的必然性に、主観的能動性が包摂されて破綻した。加えて、この官僚制国家資本主義と闘争した中国文化大革命(毛沢東思想)は、観念論の主観主義に転落し悲惨に破綻した。

20 世紀は、社会主義革命の時代ではなく、ブルジョア革命と資本主義化に終わった。官僚制国家資本主義(一党独裁=全体主義)は開発独裁(権威主義)の国家資本主義と並び、20 世紀の後発資本主義の二大典型となった。

トロツキズムの永続革命論は、民主主義革命でいきなりプロレタリア階級独裁を実現して社会主義革命へ進もうとする。農民を革命に組織できず、民族解放闘争を指導できなかった(中国革命やベトナム革命)。21 世紀の社会主義革命でもそうなる。

③社会主義革命の陣地戦 グラムシと構造改革を取り入れる

ソ連論・中国論としては、管理を独占する官僚を統制し、いずれ取って代って大衆的自主的に管理し、コンミュン・ソヴィエト型国家を実現する、そういう労働者階級の階級闘争を持続的に組織しなくてはならなかった。それは、陣地戦であり、21 世紀の直接的な社会主義革命における陣地戦に連なる。(08.12)

・中国・ベトナム革命の農村根拠地から社会主義革命の陣地戦を考案する

グラムシは東方のロシアと対比しながら、西方のヨーロッパ革命における陣地戦を構想した。しかし、ロシア革命は、都市における機動戦=武装蜂起だけではなかった。

連続的に社会主義革命が展望されていたが、直接的には民主主義革命、封建制に対する土地革命であった。農村における農民の闘争、それが陣地戦であり(ボリシェヴィキよりもエスエルが主導)、それが機動戦を支えた。

中国とベトナムの革命では、もっと明確に農村根拠地が出現した(共産党=プロレタリア階級がしっかり指導)。それが農民の封建制に対する社会革命における陣地戦であった。

社会主義革命の陣地戦を考えるに当たっては、プロレタリア階級の資本主義に対する社会革命であるという差異を踏まえた上であるが、農村根拠地は大きな教訓にできる。

・全共闘の経験を活かし資本主義批判を実態化して

社会主義革命の陣地戦を考案する

革命は全て、政治革命を含む社会革命であり、また機動戦とそれを準備し基礎づける陣地戦である。陣地戦は対抗社会、旧社会と闘争する中で出現する新社会の母胎である。

全共闘運動という体験がある。新左翼党派主導のベトナム反戦闘争と対で、陣地戦と機動戦の関係であった。学生の闘争は、資本主義に組み込まれた大学を、観念的だったが根本的・全面的に批判した(「帝国主義大学解体」)。それが出現させた対抗社会であった。

社会主義革命はプロレタリア階級独裁=政治革命が必要だが、それは労働者階級の闘争が陣地戦となり、対抗社会が出現しないと実現できない。その具体像は今では分からない。

しかし、帝国主義世界戦争や地球環境破壊の危機などに対する闘争だけでなく、資本とりわけ総資本=ブルジョア国家(地方の行政も含めて)に対する経済的・社会的闘争のウェイトが大きいのではないか。先発資本主義の「北」では、帝国主義的な寄生性と腐朽性、工業的空洞化と金融化がもたらす労働者階級の大分裂に抗し、格差の拡大と貧困の蓄積に反対する闘争でもある。

それを指導するには、社会の全分野に及ぶ資本主義に対する批判、原理的よりも実態的な批判が重要なのではないか。(おわり)(08.30)